

小林隆児著

「あまのじゃくと精神療法-「甘え」理論と関係の病理-」

A5判 240頁 弘文堂 3,400円+税
ISBN 978-4-335-65167-0

本書で、著者は14年間にわたる母子ユニット(MIU)の臨床経験を詳細にレビューして直接把握した「『甘え』のアンビヴァレンス」の観点から、土居健郎の「甘え」理論を詳細に再検討(著者の言葉では「再照射」)する。そして「甘え」理論の今日的意義を明らかにし、発達の観点から精神病理の再構築を目指している。

本書は、6章から構成されている。I章では、土居の「甘え」理論の中核的概念であるアンビヴァレンスについて、土居の論文から再検証している。土居が神経質患者に特有な「甘えなくても甘えられない心」をゲシュタルトと表現したことに著者は注目し、アンビヴァレンスは、精神療法過程の治療者患者間の相互関係の中で、その場の生の形でゲシュタルトとして自ら感知するしか捉えられない、と述べている。

次のII章では「関係」からみた「甘え」理論の精神療法の中での現れ方、扱い方を、スターン Stern, D. N.の「力動感 Vitality affect」の考え方も援用し、土居の症例の記述や自身の症例を用いて説明している、本書の中核となる章である。著者は土居が成人の妄想的な症例を扱った「勘繰り」の論文を詳細に検討し、「甘え」にまつわる感情が刺激された際に生じる異常体験が、より生物学的水準の、身体感覚と情動が未分化な原初の知覚体験そのものであることを見いだした。「甘え」は生涯にわたって人間のこころの基盤で機能し続けるものであり、「甘え」のアンビヴァレンスは成人の治療関係の中にも現れている。それを扱うためには、患者の心の動きと治療者の心の動きの相同的なゲシュタルトをとらえ、メタファとして患者に返していくことが必

要になる。このメタファの共通理解が生まれたとき、治療が展開することを、著者は症例で提示している。しかし「甘え」が多義性を含んだ日常語なだけに、土居の「甘え」理論は誤解を生みやすい。著者は「甘え」理論とスターンの力動感との類似性に着目し、スターンの言葉で言い換えようとしている。力動感 Vitality affectは「生氣情動」とも訳されている。スターンは晩年の著作 Forms of Vitalityの中で、体験の力動的側面を dynamic forms of vitality (バイタリティの力動的形)と表し、「動き、時間、強さ、空間、そして意図/方向性」が一体となって、ゲシュタルトとしてバイタリティの体験を生み出しているとしている。それは様式とスタイルであり、内容には関わらない。そしてすべての感じられた体験の基礎となっているという。著者は、このスターンの「バイタリティの形」を「力動感」という訳語で代表させ、「甘え」のアンビヴァレンスを捉える鍵概念に用いている。

次のIII章では、乳幼児期早期におけるアンビヴァレンス、たとえば、「母親が直接関わろうとすると子どもは回避的になるが、いざ母親がいなくなると心細い反応を示す。しかし母親と再会する段になると再び回避的の反応を示す」というような行動とそのゲシュタルトを、著者は「あまのじゃく」と命名する。そしてそれにより精神療法過程の治療者患者関係の特徴の核心をより一層明確なかたちで捉えることが可能になると説明する。続くIV章では、児童期から思春期、青年期、成人期までの、神経症圏の患者における「甘え」のアンビヴァレンスの現れが、多くの症例の記載を通して具体的に描かれてい

る。ここでは、前半の抽象的でやや難解な議論の意味が、症例の具体的な記述によって、読者に腑に落ちるようになるだろう。非常に示唆に富む章である。さらにV章では、精神療法関係における「甘え」のアンビヴァレンスのゲシュタルトの現れ方、捉え方、扱い方が具体的に描かれていて、精神療法初心者にはとても役に立つだろう。

そして最後にVI章で著者は、精神療法研究におけるエヴィデンスとは何か考察する。それは、面接の中で治療者がアクチュアルに感じ取ったことを言語化し、共通理解を図る作業を通してえられるものである。その意味で、治療関係の中で感じ取った「甘え」のアンビヴァレンスのゲシュタルトを「あまのじゃく」と名付けることによって、精神療法を实践する者どうしの共通理解が生まれることが、著者の最大の狙いで

あるという。

土居は成人の患者の精神療法から「甘え」理論を導き、著者はMIUでの母子臨床の経験から「甘え」のアンビヴァレンスに気づいた。どの立場からでも、最終的には最早期の関係性の体験に行き着くのが、非常に興味深い。最早期の母子間に起きている相互交流体験は、言語的に説明するのが非常に難しいが、著者は豊富な臨床素材を提示し、理論と症例における現れを照合している。読者は理論の知的な理解だけでなく、丁寧な臨床プロセスの記述をたどり、その場で著者が体験した「アクチュアル」な「バイタリティの形」に身体知覚を伴って共感し、「腑に落ちる」体験をする必要があるのではないか。そのような読み方が必要な本であると思う。

(慶應義塾大学環境情報学部：濱田庸子)